



## Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（芸術工学）
報告番号	甲第1590号
学位記番号	第16号
氏名	王 森
授与年月日	平成 29 年 3 月 24 日
学位論文の題名	中国北方漢族農村住居の空間概念に関する研究
論文審査担当者	主査： 溝口 正人 副査： 志田 弘二，久野 紀光，向口 武志

# 論文の要旨

## 中国北方漢族農村住居の空間概念に関する研究

### ～遼寧省と河北省における漢族農村住居の室の呼称とその使われ方の分析～

A STUDY ON SPATIAL COMPOSITION AND ITS MEANINGS OF THE HAN RACE RURAL DWELLINGS IN NORTHERN CHINA  
～AN ANALYSIS ON ROOM NAME AND ROOM USAGE OF THE HAN RACE RURAL DWELLINGS IN LIAONING AND HEBEI PROVINCES

王 森

#### 第1章 序論

##### 1-1. 研究の目的と背景

地域や民族固有な住空間の性格は、室<sup>注1</sup>の呼称と使われ方によって解釈されてきた<sup>注2</sup>。この際、住空間の全体系を構成する諸室の間に秩序的な関係を与えるある種の原理が内在することが予想される。この原理を空間概念と称するなら、呼称と使われ方を介して、理解される各室の性格と同様に、空間概念も当該地域・民族の固有性を計り相対化する指標となり得ると考えられる。換言すれば、形式的には類似した住空間であつても、各室の呼称や使われ方の差異があるならば、それは同時にその地域・その民族に固有な空間概念の存在を示唆しているとも言える。

例えば、伝統的漢族住居<sup>注3</sup>の主屋平面(図1上段a)と、北方漢族農村住居<sup>注4</sup>の主屋平面(図1下段b)は、いずれも三間構成の平面形式を採る。ここで、両住居の各室の呼称と使われ方に着目すると、伝統的漢族住居では、南面中央に入口を持つ中央間<sup>注5</sup>の庁と左右に脇間の卧室が配される構成を基本とする<sup>注6</sup>。中央間の庁は、接客や祖先祭祀に使われるに対して、脇間の卧室は呼称に示されるように、主として就寝に使われる<sup>1)、2)、5)</sup>。このような呼称と使われ方に示される住居は、「一明両暗」<sup>注7</sup>の空間概念で説明され、炊事空間は別棟の付属屋に配されることが多く、「明」・「暗」の領域認識の外にある<sup>注8</sup>。

一方、北方漢族農村住居は、同様な三間構成であるものの、中央間に竈、脇間に炕(オンドルのこと)が設けられる<sup>注9</sup>点で大きく相違する。この相違に応じて、中央間の外屋は炊事が行われ、「一明両暗」形式で行われていた接客・祭祀が両脇間の里屋で行われるなど、室の呼称ないし室の使われ方には、異なる傾向が見られることが既往の研究で報告されている<sup>注10</sup>。

即ち、一見類似した三間構成の平面形式の両者に対し、諸室の呼称・使われ方・装置(竈、炕など)に着目すると相違が生じることが解る。このような相違に意味される住空間の性格を

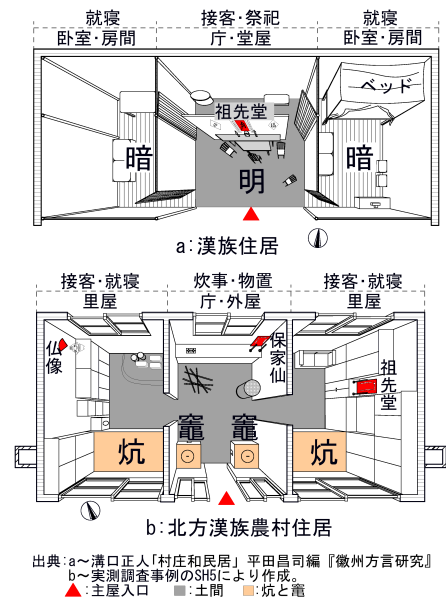


図1 漢族住居(a)と北方漢族農村住居(b)の平面構成

表1 三間構成漢族住居と北方漢族農村住居の呼称と使われ方

室割	右脇間	中央間	左脇間
呼称	卧室・暗間・房間・房	庁・明間・庁堂・上庁・正庁・堂屋・堂前	卧室・暗間・房間・房
使われ方	就寝	接客・祖先祭祀・団楽	就寝
空間概念	暗	明	暗
呼称	里屋・腰屋・西屋・卧室	庁・厨房・堂屋・外屋・外地屋・外地・堂	里屋・腰屋・西屋・卧室
使われ方	接客・祭祀・座業・団楽	水と火の作業・物置	接客・祭祀・座業・団楽
空間概念	?	?	?

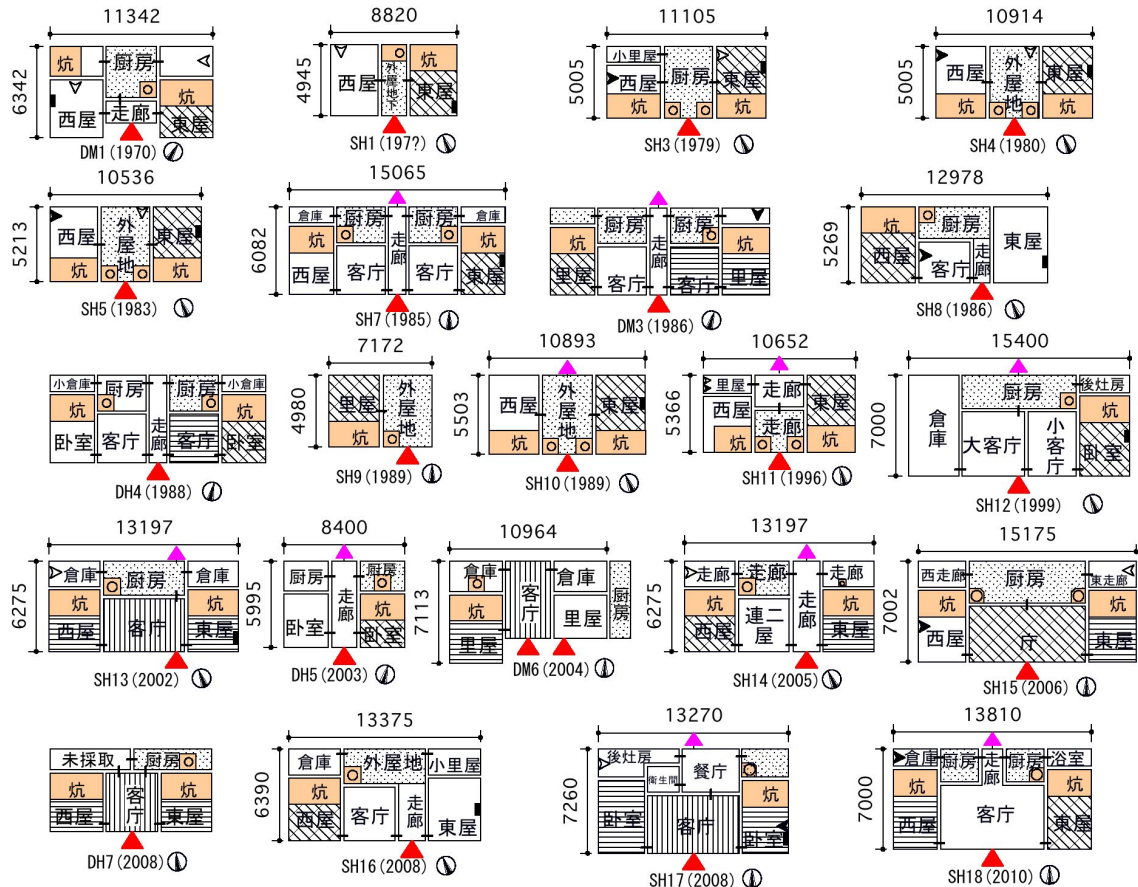
※ 表中の呼称・使われ方・空間概念は参考文献1、2、5～12によるものである。  
なお、呼称と使われ方について主とした傾向の把握である。

踏まえ、伝統的漢族住居に内在する「一明両暗」と異なる空間概念は、北方漢族農村住居に存在することが予想される(表1)。

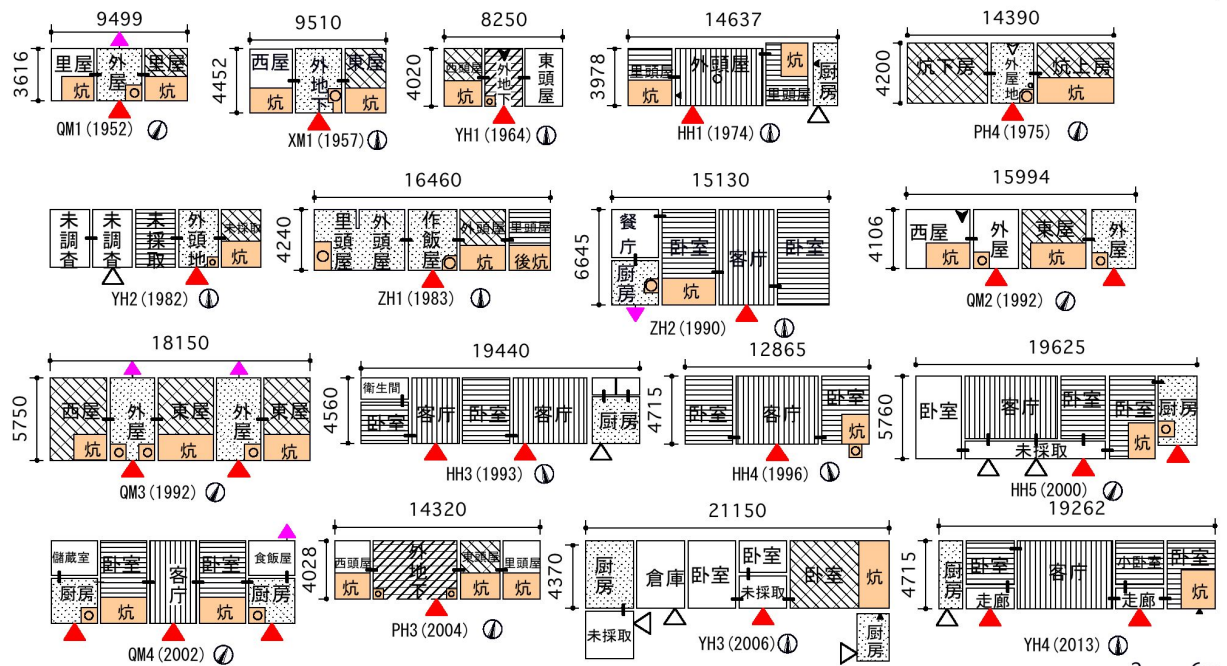
以上より、本研究では、先行研究<sup>注11</sup>でも取り挙げてきた遼寧省及び河北省の農村住居の室の呼称と使われ方に対する実態調査を行い、既往知見と照らし合わせることを通じて、北方漢族農村住居の空間概念を明らかにすることを目的とする。

表2 対象住居の平面図

遼寧省  
(22)



河北省  
(17)



注1: 平面図の下番号は宅番号と建設年代を示す。

注2: DM3, DH4, DH7が同じ遼寧省のSH7の寸法を、YH3が同じ村のYH1の寸法を、QM4が同じ村の形式及び年代に近いQM3の寸法を参考に作図した。

注3: 番号の一つ目のローマ字は、村の略称である。S: 双山子村、D: 東京陵村、X: 黄興埔村、Y: 永寧鎮、H: 黄泉寺村、P: 盆窟村、Z: 下辛莊村、Q: 清東陵村。番号の二つ目のローマ字は、民族の略称である。H: 漢族住居、M: 滿州族住居。番号のローマ字後の数字番号は村毎に調査事例の年代の順に基づいて付けた。

凡例: : 主屋入口 : 主屋通用口 : その他入口 : 炕と竈 : 焚き口 : 祖先祭祀 : 仏像祭祀  
 : 保家仙祭祀 : 接客 : 炊事 : 寝起き : 接客+寝起き : 接客+炊事 : その他機能(通過・物置)  
 なお、炕の有る室の使われ方について、炕の上をハッチングしていない。

表3 間口及び奥行き方向の室の分割状況

地域	炕の位置	間口 奥行	二間		三間			四間			小計	合計		
			二列	三列(走廊)	三列	四列(走廊)	三列	四列	五列(走廊)					
遼寧省	南	一列		無し		無し	無し	無し	無し	無し	無し	4	5	
	北				無し		無し	無し		1				
	南	二列	無し				1			2	1	3	無し	3
	北		1											4
			無し	無し	無し			無し						7
			1											3
小計			1	2	7	1	1	3	3	1	3	—	—	
合計			3		12			7			—	22		

地域	炕の位置	間口 奥行	三間	四間	五間			六間	小計	合計		
			三列	三列	四列	三列	四列	五列			五列	
河北省	南 or 東	一列			無し			無し	無し	5	11	
										3		
		二列		無し				無し		2		
				無し		無し				1		
	無	二列	無し	無し			無し	無し		3	6	
										1		
小計			3	1	1	1	4	3		4	—	—
合計			3	2			8		4	—	17	

凡例

: 炕と竈

: 主屋入口

塗り込めは中央間に分割がある物件を示す。

凡例 : 炕と竈 : 主屋入口 塗り込めは中央間に分割がある物件を示す。

## 1-2. 先行研究の課題と本研究の位置付け

北方住居に関する研究について、劉敦楨<sup>6)</sup>は、中国全土に渡って住居の特徴を説明している。張馭寰<sup>7)</sup>は、吉林住居の漢族と他少数民族毎に炕の特徴と住居形態、住まい方が報告されている。青木正夫<sup>8)~9)</sup>は、山東省の農村住居の中央間における公私分離を図る玄関の形成、夏の暑さによる竈の端部化を図る大型化する住居平面の特性、黄土高原地区における「一明一暗」型住居の地域分布と生成過程を解明している。西村伸也<sup>10)~13)</sup>は、東北農村住居における炕と竈の配置に着目し、中央間における接客行為の発生は、炕の上での生活行為の分化を図る結果と指摘している。

然し、南面入りとする住居の中央間における玄関という平面形式の形成に関して、炕と其れに応じる竈の配置と住居の大型化に示される住居平面の特性という物理的要因、及び室の呼称と使われ方の対応関係に意味される住居の空間概念という認識的要因からの分析に至っていない。

## 1-3. 研究の方法と研究の構成

本研究は、まず、北方漢族農村住居を特徴づける炕と竈の配置の地域的、年代的傾向を把握し、住居平面の特性とその形成のプロセスを検討する(第2章)。続き、室の呼称とその使われ方との対応関係の特性を明らかにする(第3章)。最後、結論で提案した北方漢族農村住居の空間概念は「一明両暗」とは異なるものを指摘する(第4章)。

なお、9集落に行った悉皆調査の成果を付章としている。

## 1-4. 研究対象と調査概要

本研究は、中国北方に位置する遼寧省(瀋陽市・遼陽市)、河北省(遵化市・北京市)の農村地域の住居を対象としている。2012年から2014年まで4回の現地調査を実施し、居住者の聴取により復元した住居を含む計63件の情報を把握できた。本研究では、住居内部の実測、現在の室の呼称と使われ方の詳細な聞き取りができた、南面入りとする39件住居のデータを利用している(表2)。

## 第2章 炕と竈の配置からみた住居平面の特性

### 2-1. はじめに

中国北方漢族農村住居と言えば、南面入りで、炕が日当たりの良い脇間の南側、竈が中央間の南側に配置される三間構成の平面は伝統的であった<sup>注12</sup>。然し、近年、竈の中央間南側の配置と住居の南面入りと適合しない実態が生じるため、炕と竈は従来と異なる配置変化が生じている。この実態を分析した青木正夫・西村伸也の研究では、気候や炕上における接客という生活行為の分化などの理由で中央間南入口部から竈を移設し、中央間の平面形式そのものが独立入口空間(玄関)の形成によって多様化されたと指摘している<sup>注13</sup>。そこで、本章では、次章以後での室の呼称と使われ方の対応関係の特性への分析、及び空間概念の提案に先立ち、まず、北方に位置する遼寧省と河北省における39件南面入り住居平面の特性を確認し、その形成のプロセスを、炕と竈の配置と住居平面の大型化から明らかにする。



## 2-2. 炕と竈の配置からみた住居平面の特性

表2に示すように、両地域とも三間構成の平面が伝統的で、時代領域において、間口方向と奥行き方向に拡大し、平面のパリエーションが多様化していることが確認される。

**ア 住居平面における室の分割及び寸法特性：**表3では、横軸に間口方向の室の状況を間<sup>注14</sup>毎の室列の数に、縦軸に奥行き方向の室が分割のない一列、分割のある二列に設定し、地域別の住居間口及び奥行き方向の室の状況をまとめた。遼寧省住居の平面が奥行き方向へ室の分割が22件のうち、17件で、それと伴って中央間の間口方向に個室又は走廊の分割が特徴である。これに対して、河北省住居の平面における奥行き方向の室の分割が17件のうち、6件で、住居の平面は両脇へ室の増設が生じる傾向がわかる。

図2に示すように、南面入り住居の主屋平面の間口及び奥行きの寸法状況を建設年代毎に整理した。この住居の間口及び奥行き寸法の平均値の差の意味を読み取ることによって、同じ年代区分における間口寸法は遼寧省より河北省が大きいに対して、奥行き寸法は河北省より遼寧省が大きいであることが解る。一方、年代軸において、遼寧省の間口と奥行き寸法が増えるに対して、河北省の間口が増えるが、奥行きの変化が少ないという住居平面寸法の相違がわかる。つまり、住居の平面規模において、遼寧省と河北省とは異なる住居の大型化が進められていることが解る。

即ち、両地域住居の大型化に伴い、遼寧省では、中央間の平面が分割による多室の集合によるものに対して、河北省では、一室となる中央間の平面のほうが顕在している。これは住居平面を形成する諸室の規模とその全体集合の仕方に示される住居の大型化に地域相違が生じることを示している。

**イ 炕と竈の配置の対応関係：**炕と竈の配置から住居の平面の特性を分析にあたって、炕と竈の配置のパリエーションをまとめた(表4)。中央間南面入口部に竈を設け、且つ炕も南面に設ける配置が遼寧省7件、河北省8件である。一方、中央間南面入口部に竈を設けない北、脇、室外の住居における炕の配置(室外・室外の1件を除く)は異なっていることがわかる。即ち、遼寧省では、炕は北側が15/22、竈は炕の配置と対応した北側であるに対して、河北省では、炕は北側が無く、東側の2件を除く6件は南側の配置で、竈は遼寧省のように北側ではなく、脇、室外であることがわかる。これは遼寧省と河北省の異なる炕の配置に応じて、両地域の住居における異なる竈の移設が生じたことを示している。

**ウ 年代別の炕と竈の配置：**中央間南面入口部に玄関の有無で相違する中央間の平面を、炕と其れに応じる竈の配置の地域的・年代的な傾向をみた(表5)。両地域の住居の中央間南面入口部は、1970年代から竈の移設に伴う玄関が形成し始め、

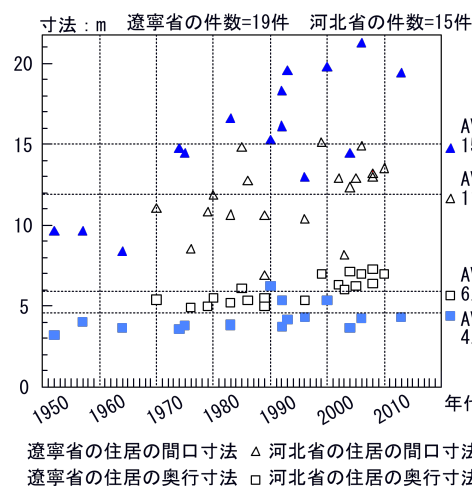


図2 年代別の住居主屋平面の寸法

表4 炕と竈の配置の対応関係

炕 竈	遼寧省		河北省		合計
	南	北	南	東	
南		無し			15
北			無し	無し	15
脇	無し	無し			4
室外					5
合計	7	15	14	2	39

凡例：▲：主屋入口。■：炕と竈。□：玄関

表5 年代別の炕と竈の配置

玄関 有無	炕と竈の配置	年代										小計	合計
		1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010					
無し	南・南	遼寧	-	-	-	1	-	4	-	1	-	-	6
		河北	-	2	-	1	-	2	-	1	-	1	8
有り	北・北	遼寧	-	-	-	2	-	4	-	1	-	8	16
		河北	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	南・脇	遼寧	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
		河北	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	南・室外	遼寧	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
		河北	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	東・室外	遼寧	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
		河北	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	2
	室外・室外	遼寧	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
		河北	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
小計			0	0	0	3	1	8	2	2	4	4	1
合計			3			36							39

凡例：■：炕と竈(片側のみ場合がある)。▲：主屋入口。□：玄関 -：該当無し。  
なお、挙げられた住居平面は炕と竈の位置を示す一例で、同タイプの中、異なる平面も存在する。

2010年代まで続くに対して、その以前は両地域ともなかったことが明らかである。更に、遼寧省では、1970年代から1990年代まで炕と竈の南側と北側の配置が共存するに対して、2000年代以後、北側のみの地域性がある。一方、河北省では、各年代における炕の南側が強く、炕の配置に応じる竈は従来の中央間南面入口部から両側や室外の配置に変化し、最近では、炕と竈が取り壊される住居も確認できる(室外・室外)。これは1970年代を境に、北方漢族農村住居における異なる炕の配置の仕方に応じた異なる竈の移設により、中央間南面入口部は玄関という平面形式への変化が生じた特性を示している。

表6 室の呼称と使われ方の地域と時代の傾向

[illegible]

### 2-3. 考察

このように、既往研究<sup>注15</sup>で取り挙げてきた中央間南面入口部における玄関という平面形式の発生は北方農村住居において比較的広い範囲で生じていることがわかる。伝統的南面入り、三間構成北方漢族農村住居における炕と竈の南側配置で生じる生活の矛盾が玄関特化で調整されていることは両地域に共通しているが、住居平面における対応の仕方が異なることがわかる。それは、遼寧省は間口及び奥行き方向の室の分割に伴う住居の大型化が生じ、北炕の配置に応じて、奥行き方向に分割された室(脇間の背室も含む)に竈を移行する。これに対して、河北省は間口方向の住居の大型化が顕著であり、竈は南炕に応じて脇間に増設された室、あるいは室外に移設される傾向がある。即ち、中央間南面入口部に形成された玄関という平面形式は、両地域住居における異なる炕の配置の仕方と住居の大型化に起因する竈の移設で実現されたことがわかる。

### 第3章 室の呼称と使われ方の対応関係の特性

### 3-1. はじめに

前章において、南面入りとする北方漢族農村住居の中央間は玄関という平面形式へ変化させた結果、中央間が多様なバリエ

表7 室の呼称と使われ方の対応関係

室割	呼称	使われ方	炊	客	炊＋客	寝＋客	寝＋物	祭	その他	小計	
		地域									
中央間	外 庁	遼寧省	6	－	－	－	－	－	－	15	
		河北省	6	1	2	－	－	－	－		
		遼寧省	－	4	－	－	1	4	－	3	17
		河北省	－	5	－	－	－	－	－	－	
左脇間	呼称 地域	客＋寝	寝	客＋祭＋寝		祭＋寝	祭＋物	その他	小計		
		遼寧省	4	3	6		1	2	1	24	
		河北省	5	1	－		－	－	1		
		遼寧省	2	－	1		1	－	－	10	
		河北省	1	5	－		－	－	－		
右脇間	呼称 地域	客＋寝	寝	客＋祭＋寝	炊	祭＋寝	祭＋物	その他	小計		
		遼寧省	5	5	－	－	－	1	8	27	
		河北省	3	1	－	1	－	－	3		
		遼寧省	－	1	－	－	－	－	2	9	
		河北省	－	4	－	－	－	－	2		

凡例：客：接客。祭：祖先祭祀。寝：就寝。炊：炊事(その他を含む)。物：物置。その他：物置や通過。  
－：該当無し。

ーション(庁・走廊など竈のないもの)を持つ平面、即ち、伝統的漢族住居における中央間の玄関ホールに意味される庁に類似するものに変形されたことを明らかにした。一方、南面入口部における竈の移設に伴って形成された中央間の庁は、公私機能の分離や炕の上での生活行為の分化などに起因して、接客に使われるようになるものと指摘されている<sup>注16</sup>。そこで、本章では、このように形成された北方漢族農村住居の中央間の庁という

空間が、各室の使われ方の変化によるものかに視点を置き、室の呼称と使われ方の対応関係を明らかにする。

### 3-2. 室の呼称と使われ方の対応関係の特性

ア 外・庁・屋・卧室の呼称：表6に示すように、横軸に聞き取りによる間毎の室の呼称と使われ方を、縦軸に地域毎の住居を年代順に並べ、39件の住居の中央間及び左右脇間の呼称と使われ方(黒い枠内)をまとめた。なお、左ノ間・右ノ間、左次間・右次間は主に炊事・その他の物置に使われるため、検討対象外とした。更に、中央間の呼称は外、庁、その他に、使われ方は接客、炊事、就寝、その他に分類した。左右の脇間の呼称は屋、卧室、その他に、使われ方は接客、就寝、炊事、祭祀、その他に分類した。外は外屋、外屋地下・外屋地・外頭屋など前置詞である外が付く呼称で、庁は客厅の略称である。屋は里屋・里頭屋・東屋・西屋など後置詞の屋が付く呼称で、卧室と共に炕のある左右の脇間の呼称を占める。

イ 室の呼称の年代傾向：表6に示すように、中央間の呼称に関して、外は早期の住居の呼称であり、住居の建設年代が下がるに連れ減少するにに対し、庁は1970年代までの住居には称されず、その後、中央間の玄関(竈の移設後の南面入口部)の形成に伴い、増加する一方である。左脇間に関して、屋は早期の住居の呼称であり、各時代で一貫してみられるのに対して、卧室は1980年代末の住居の呼称であることがわかる。また、右脇間の呼称は左脇間と略同じ傾向を持っている。これは庁と卧室という近年住居の呼称に対して、外と屋という早期住居の呼称は現在に伝わってきていることを示している。

ウ 室の呼称と使われ方の対応関係：表7に示すように、横軸に室の使われ方を、縦軸に地域別の室の呼称を設定し、中央間の外・屋、脇間の庁・卧室という呼称とその使われ方の対応関係をまとめた。中央間では、外と呼ばれるものは両地域合計15件で、河北省の3件接客を除く12件が炊事に使われる。即ち、外という中央間は炊事に使われる傾向がある。庁と呼ばれる17件は炊事が行われず、9件接客を除き、遼寧省の住居の中央間は補助寝室(5件)、その他(3件)や予備室に使われている。一方、中央間における祖先祭祀の行為は両地域の住居ともない。即ち、北方漢族農村住居の中央間は本来接客・祖先祭祀の使われ方を前提としない空間であり、用途上の変更に対応でき得る副次的な室の性格を有していることがわかる。

左脇間では、屋と称される両地域住居24件のうち、接客・就寝が同室に行うものが計15件、就寝のみが4件であるに対して、卧室と呼称される左脇間10件のうち、接客・就寝が同室に行う4件、就寝のみが5件である。一方、祖先祭祀が遼寧省住居に確認され、11件のうち屋(9件)と卧室(2件)に行われる。これは屋と称される左脇間は接客、祖先祭祀、就寝が同室で行う室の性格を有していることを示しており、そして、近年、

卧室に呼び変えても左脇間が居室としての使われ方の変わりが少ない。

右脇間は屋と卧室に合わせて36件で、接客・就寝が同室に行う計8件、就寝のみが計11件、祖先祭祀1件であるが、その他の物置に使われるものは、両地域計15件を占め、居室としての利用は左脇間が優先されることが共通している。これは漢族で左を上位とする考えによるものと考えられるが、詳細は不明である。

### 3-3. 考察

以上のように、室の呼称と使われ方の対応関係の分析により、「一明両暗」漢族住居における室の呼称と使われ方に意味される「明」・「暗」の室割の仕方に比べ、伝統的三間構成の北方漢族農村住居において、「明」と「暗」に適する使われ方は、その住居平面の室割に一致しない特性を有していることがわかる。即ち、接客・祭祀の生活行為が行われる室は中央間ではなく、左右脇間の炕のある屋であるに対して、外という中央間は、炊事に使われ、接客・祭祀本位の構えを持たないことが明らかである。

一方、時代が下がると、接客が行われない庁が中央間に形成される。これは、北方漢族農村住居の中央間の庁は、必ずしも公私機能や炕の上での接客行為の分化を前提としない空間であることを示している。

## 第4章 結語

本研究の成果およびこれからの展望について説明する。

### 4-1. 各章のまとめ

図3に示すように、第2章では、炕と其れに応じる竈の配置の視点から住居の平面特性の解明を目指した。北方漢族農村住居の中央間南面入口部を玄関という平面形式へ変化する平面の特性は、炕の配置に起因する竈の移行と住居の大型化で対応されたことを明らかにした。

第3章では、室の呼称と使われ方の対応関係の解明を目指した。伝統的三間構成の北方漢族農村住居では、接客・祭祀・就寝に使われる室は左右脇間を占める屋で、炊事に使われる室は中央間を占める外である。これに対して、近年、中央間の呼称は庁に称されるが、その使われ方は必ずしも接客に使われないことから、北方漢族農村住居の中央間の庁は、必ずしも公私機能分離や炕の上での接客行為の分化を前提としない空間であり、用途上の変更に対応でき得る副次的な室の性格を有していることを明らかにした。

### 4-2. 外という言葉の解釈

客を応接する時に、「請進屋里=屋の中に入ってください」というように、屋という言葉は住居の内部を示し、炕を持つ居室を指す。外という単語は外側の意味を示し、一般に外辺、

外頭といった単語の表現を用い、空間的・平面的に設定されたある範囲の外部を示す<sup>注17</sup>。このような「外」と呼ばれる中央間は住居の外部であることがわかる。一方、住居の中央間の庁の意味に対応する使われ方が一時的に違う特性は、「外」が住居の外部である性格は「庁」に受け続いていることと理解できよう。

#### 4-3. 「一外両明暗」空間概念の提案

表8に示すように、漢族住居の「一明両暗」空間概念で北方漢族農村住居を理解すると、「明」を意味する接客・祭祀という使われ方は、左右の脇間に存在するに対して、「暗」は就寝という生活行為が行われる時間帯のみの性格を有している。即ち、「明」と「暗」ということ自体が間仕切りの壁で明確に分かれる「一明両暗」空間概念を持つ漢族住居に比べ、「明」と「暗」に適する室の使われ方として存在するが、住居平面の室割に一致していない伝統的北方漢族農村住居平面の特性が今回の分析により明らかとなった。

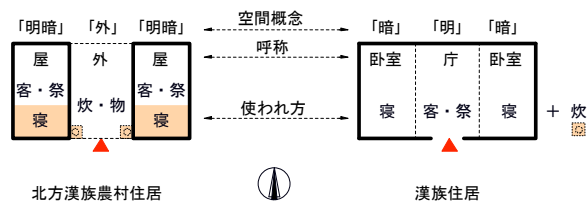
これは炕と竈を中心とした北方漢族農村住居の気候・風土に適した関係性により、「明」と「暗」が脇間に共存していることが捉えられるが、三間構成という形式だけ保持されたことは、伝統的漢族住居平面の本質を示していると理解できよう。

一方、「外」という中央間の呼称の意味、接客に断らない中央間の「庁」の使われ方の意味、炊事という漢族住居の「明」と「暗」の領域認識の外である使われ方の意味、三点に合わせた中央間のヒエラルヒーの解釈によって、北方漢族農村住居の中央間（「外・庁」）が「外」である性格として認識されていることが明らかである。更に、「外」と「明」という空間概念に属する「庁」のある住居では、炊事は分割された中央間・脇間の背面室（遼寧省）、両脇・室外（河北省）への移設は、炊事室の排除された空間の性格を示している<sup>注18</sup>。

以上より、伝統的北方漢族農村住居は、接客・祭祀・就寝の使われ方に意味される「明」・「暗」が未分化する脇間（「屋」）と、「明」・「暗」で解釈できない、炊事の使われ方に意味される「外」である中央間（「外」）と、によって、三間構成の平面の室割がされていることがわかる。

従って、本研究の文末には、このような室の呼称と使われ方に応じた北方漢族農村住居平面は、「一外両明暗」という空間概念で理解できるものとして結論付けることができた。そして、住居の中央間には、分割も含む多様なバリエーション（分割・竈の移設）を持つ平面特性が生じたのは、「外」として理解できる空間概念の存在がその故である。

一方、1980年代半ば頃に区切りを以て、中央間は南面入口部に玄関へ変化することに応じて、室の呼称（「外」）ないし、その平面形式には「一明両暗」空間概念で理解できる伝統的漢族住居の庁になりつつあるが、接客に意味される庁としての利用は1990年代初期の住居に生じたことがわかる。即ち、北方漢族



章	研究対象	分析要素	北方漢族農村住居研究の結果	漢族住居
第2章	平面特性	炕・竈	炕の配置・住居大型化による玄関形成	独立な玄関
第3章	呼称と使われ方の対応関係	呼称	早期 中央間は外、脇間は屋	中央間は庁
		近年	中央間は庁、脇間は屋・卧室	
		使われ方	早期 外に炊事、屋に接客・就寝・祭祀	中央間に接客・祭祀 別棟の付属屋に炊事
		近年	庁は補助室、屋・卧室に接客・就寝・祭祀 庁に接客、屋・卧室に就寝・祭祀	
第4章	空間概念		「一外両明暗」→「一？両明暗」→「一明両暗」	「一明両暗」

凡例：▲：主屋入口 ■：炕・竈

？：庁は接客せず、物置や補助用室とした意味を示す。

図3 各章の研究のまとめ

表8 「一明両暗」と「一外両明暗」空間概念の比較

比較項目	室割	空間概念	呼称	使われ方			
				接客	祖先祭祀	就寝	炊事
漢族住居	中央間	「明」	庁	●	●	×	×
	脇間（左・右）	「暗」	卧室	×	×	●	×
	別棟	外部		×	×	×	●
北方漢族農村住居	中央間	「外」	外	×	×	×	●
			庁	×	×	△	×
	脇間（左・右）	「明暗」	屋	●	●	●	×
			卧室	●	●	●	×
	背面室・両脇の室	排除される室		×	×	×	●

※本研究で取り挙げた室の呼称と使われ方の傾向を比較している。  
凡例 ●：行われる。×：行われない。△：補助・用途変更可。

農村住居において、「一外両明暗」から、「一明両暗」空間概念へ変化するプロセスの中、中央間の呼称と使われ方が対応しない過渡期とした葛藤が見られた（表6）。これは、室の呼称と使われ方の対応関係で理解される北方漢族農村住居の「一外両明暗」という空間概念は、非恒常性を持ち、年代領域において、常に動的な変異が生じることを示している。

今後は、北方漢族農村住居の中央間が礼拝としない室の性格の解明が課題としている。

#### 注記

注1）室は、間口方向の空間の呼称、基本的に一間＝一室で、二間を一室、一間半一室の場合もある。

注2）参考文献1、参考文献2、参考文献3、参考文献4に参照。

注3）本研究で扱う漢族住居とは、浅川滋男氏・溝口正氏氏による中国江南・華南地域の漢族住居をモデルとしている。

注4）中国は北嶺淮水（秦嶺淮河）を地理分界線とし、北方と南方に区画されている。北方は華北（河北省、河南省、山東省、山西省）、東北（黒龍省、吉林省、遼寧省）、西北（陝西省、青海省）、寧夏回族自治区、内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治



区などの地が含まれ、本論文は、北方に位置する河北省と遼寧省の農村地域の漢族住居を「北方漢族農村住居」としている。

注5) 本稿で扱う住居の平面バリエーションが多様である。複数室と内部で連関する主屋入口を設ける室を中央間とし、中心軸から偏った位置に主屋入口が設けられでも、その室を中央間と定義する。この点で厳密には劉敦楨『中国住宅概説』で取り上げる間口三間の「中央の部屋」、あるいは、茂木計一郎ほか『中国民居の空間を探索』で言及する「一明両暗」の「中央の室」とは異なる。

注6) 参考文献6に参照した。

注7) 参考文献2、参考文献9に参照した。

注8) 参考文献1に参照。浅川氏は竈の持つ台所は住まいの中心領域から排除された周縁の領域を占めることを指摘している。つまり、江南漢族住居の台所は住まいの中軸線上に位置する門及び庁堂と対比する空間的意味が与えられていると言及している。

注9) 参考文献7に参照した。

注10) 参考文献10、参考文献11、参考文献12に参照した。

注11) 参考文献10、参考文献11、参考文献12、参考文献13に参照した。

注12) 参考文献7に参照した。

注13) 参考文献8、参考文献12に参照した。

注14) 調査対象地では、間口行きの壁と壁の間を「間」と言われ、室の単位として一間という言葉ができています。一間の室の間口は概ね3m前後であり、住民は主屋規模を奥行き分割に関わらず、この「間」の倍数で認識している。

注15) 参考文献8、参考文献12に参照した。

注16) 参考文献8、参考文献10、参考文献11、参考文献12に参照した。

注17) 名古屋市立大学図書館蔵『中日辞典』凸版印刷株式会社、1992.1.1

注18) 参考文献1に参照した。

## 参考文献

- 1) 浅川滋男:『住まいの民族建築学～江南漢族と華南少数民族の住居論』建築資料研究社、1994. 6.
- 2) 茂木計一郎ほか:『中国民居の空間を探索』群居類住-“光・水・土”中国東南部の住空間、建築資料研究社、1991. 4. 30.
- 3) 吉川雅之 溝口正人:言語研究から伝統的民家の調査と保存を考える 第1回中国方言文化国際学術討論集会予稿集、151-160、2012. 3.

4) 谷内 麻里子 塩谷 寿翁:チベット族の住まいにおける人々の空間認識と行動から見いだされる空間概念 中国雲南省シャングリラ(中旬)県・プーレイの場合 日本建築学会計画系論文集第76巻 第667号、1585-1592、2011. 9.

5) 伊丹祐介 溝口正人:横江村瑤族民家の平面構成-室配置と室名による分析 日本建築学会学術講演梗概集(東海)、2012. 9.

6) 劉敦楨:『中国住宅概説』鹿島出版社、1976.

7) 張馥寰:『吉林民居』、天津大学出版社、2009. 9.

8) 青木正夫 浦良一ほか:煙台地区における農村住宅型とその発展過程 農村計画学会誌 Vol. 2, No. 3, 1983. 12.

9) 周南・青木正夫:中国における「非一明両暗」型四合院に関する研究、その1 四合院の平面類型と「非一明両暗」型住宅の分布 日本建築学計画系論文集第518号、181-188、1999. 4.

10) 棒田恵 西村伸也ほか:改築と増築によるカンと炊事空間の変容と機能分化 中国東北の農村住居における空間変容に関する研究 その1 日本建築学会計画系論文集第78巻、第694号、2465-2472、2013. 12.

11) 棒田恵 西村伸也ほか:カンをもつ農村住居の炊事空間の変容 中国東北部の農村住居における空間変容に関する研究 2 日本建築学会計画系論文集 第79巻 第702号、1729-1736、2014. 8.

12) 徐敏 西村伸也ほか:中国東北部大連市の農村住居における外地の家具と設えからみる入口空間の変容 日本建築学会北陸支部研究報告集 第57号 2014. 7.

13) 岡本拓郎 西村伸也ほか:カンと熱源の関係から見る空間構成について 中国東北部の カンを持つ農村住居の変容に関する研究(2) 日本建築学会大会学術梗概集(関東)2015. 9.

## 本論文に関する研究業績

- 1) 王淼 溝口正人 向口武志:中国東北漢族住居における門の位置と主屋平面の関係—瀋陽市双山子村を事例として 日本建築学会学術報告集 第21巻、第48号、783-787、2015. 6.
- 2) WANG Miao, MIZOGUCHI Masato, LAI Wenbo: A Study on the Feature of Spatial Structure and Its Formative Factors in Northern Chinese Farmhouses - A Perspective of Function and Arrangement. DOI: 10.13791/j.cnki.hsfwest. 2015, 30(05): 63-70.

## 論文審査の結果の要旨

提出論文は、中国北方の事例として河北省及び遼寧省における農村地域の漢族住居がどのような空間概念に基づいて形成されているかを実態調査に基づき考察した研究である。遼寧省と河北省の計9か村で実施した詳細な実測と聞き取り調査39例に基づいて、平面と機能、室の呼称を分析し、他の地域と大きく相違する当該地域の漢族住居の平面形式と使われ方の実態把握から、背景にある空間概念の相違を指摘した。

論文は全4章で構成されている。第1章は序論である。中国の中部および南部を主たる地域として進められてきた従来の研究では、伝統的な漢族住居は「一明両暗」という空間概念に基づいた三間構成の平面が特徴とされてきた。本研究は、北方の漢族住居が同様な三間構成ながら炕（カン：オンドルのこと）が設置された平面となる点で異なり、その相違に応じて各室の使われ方も異なることに着目し分析する意義を述べている。

第2章では、北方漢族農村住居を特徴づける炕と竈の配置の地域的、年代的傾向を把握し、両省の住居平面の特性を検討している。炕の位置に連動する竈の配置と中央間南面入口との調整が、河北省では竈を両脇に移動させる形で、遼寧省では炕を北側へ移動させる形で図られている点で相違すること、一方で両省ともに中央間は竈のないホールとなっている点で同様であることを指摘している。

第3章では、各室の呼称と使われ方の対応関係の分析から、建造年の古い事例では儀式や接客に対応する室は中央間ではなく東西脇間であることを指摘し、それらの室の呼称に(屋)が用いられること、中央間は炊事場とはなるが就寝や接客の機能を持たない点で伝統的な漢族住居と大きく異なり、室の呼称に(外)が用いられること、またそのために中央間にバリエーションが生じていること、そして時代が下ると竈の移動に対応して中央間が接客に対応した空間に変化し、(庁)の呼称が用いられること、また東西脇間では(臥室)と呼ぶ事例も生じることを指摘している。

第4章は、以上の分析をまとめた結章である。北方漢族農村住居では、住居としての主要な機能を受け持つのが東西の脇間であり、竈が設けられる中央間は副次的な空間であることを整理した上で、それが「一明両暗」という空間概念とは大きく異なる点を指摘し、東西の脇間が伝統的な漢族住居での「明」と「暗」に相当し、中央間はそれらとは異なる「外(がい)」と整理できる空間で、平面は「一外両明暗」という概念で把握できるものと結論づけ、近年では、中央間の機能の変化に対応して「一明両暗」と理解できる平面に変化している点を指摘している。

以上本論文は、中国北方における漢族住居の空間的な理解に有効となる概念を、実態に即した分析から指摘して高く評価される。空間的な観点から漢族住居の理解に新たな知見を与えるものであり、博士（芸術工学）の学位授与論文に値するものと認められる。